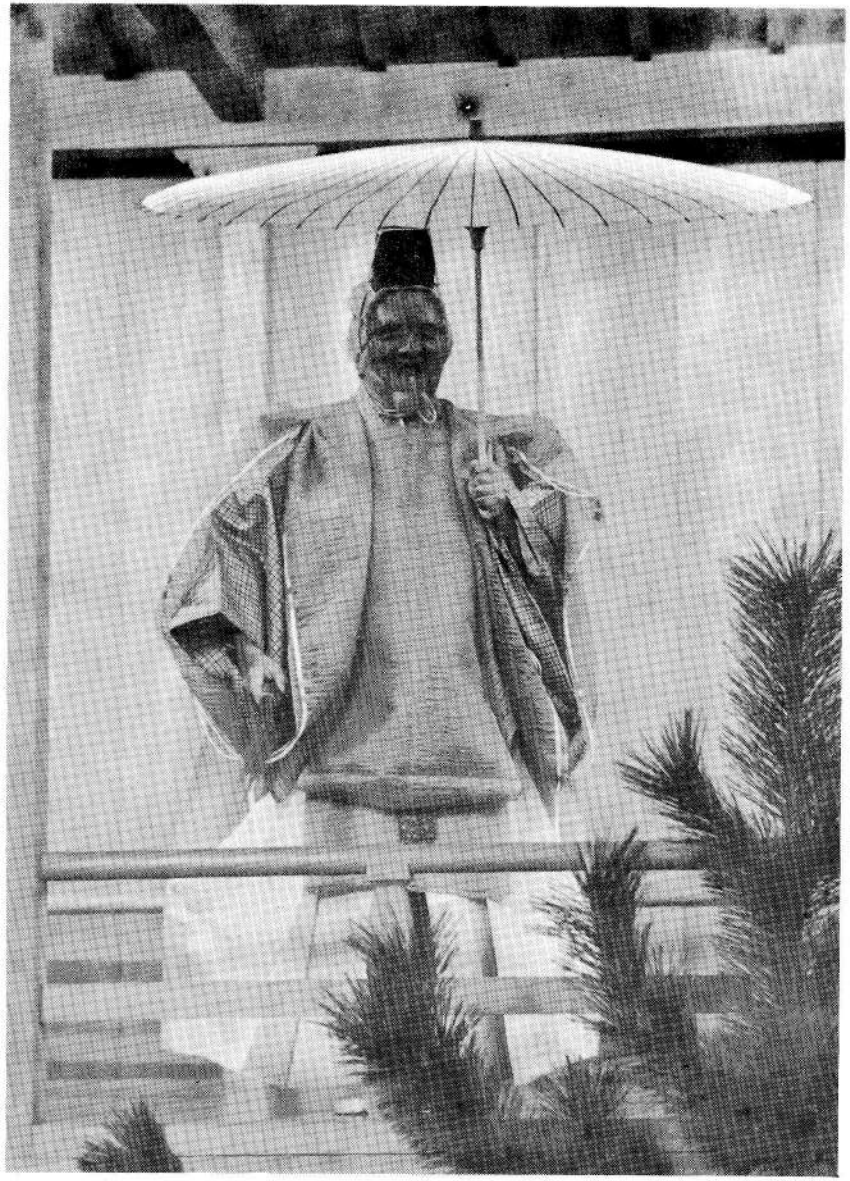
風韻

第10号

（一九七〇年度）

神戸大学風韻会

昭和45年 3月 20日 印刷
昭和45年 3月 25日 発行
発行所 神戸大学 風韻会
神戸市灘区六甲台町
印刷所 青野出版印刷KK
神戸市灘区将軍通4丁目84
電話(86)4089 (87)2838



蟻　通　　宇治正夫

神戸観世会　昭和44年10月　於上田観正会舞台

目　　次

第10号

●五十年の体験（その五）……宇治　正夫　1

●謡と試験と会話……藤井　茂　3

●先輩寄稿

•学生の頃の思い出……松岡　誠夫　5

•大学紛争は当然である……井上　文男　5

●先輩便り……7

牧沢　善二　近藤哲久・八千代　米田　勝美

五十嵐勝三　原　敏郎

○「蝉丸」に思う……L 19 武田　京子　8

○平家灌頂巻……B 18 菊地　侃　12

○「ある風韻会人の呟き」……E 18 中島　克巳　17

○風韻会での思い出……T 18 小川　忠彦　18

○連絡船……E 19 根岸　義明　19

○高校から大学へそして何処へ……T 21 赤木　康雄　21

◎昭和44年度風韻会活動報告

この一年をふり返って……B 19 川辺　利招　22

文化総部活動報告……B 19 谷村　鉄郎　23

あしあと……23

幹事長就任にあたって……E 20 福田　啓介　26

◎住所変更通知……27

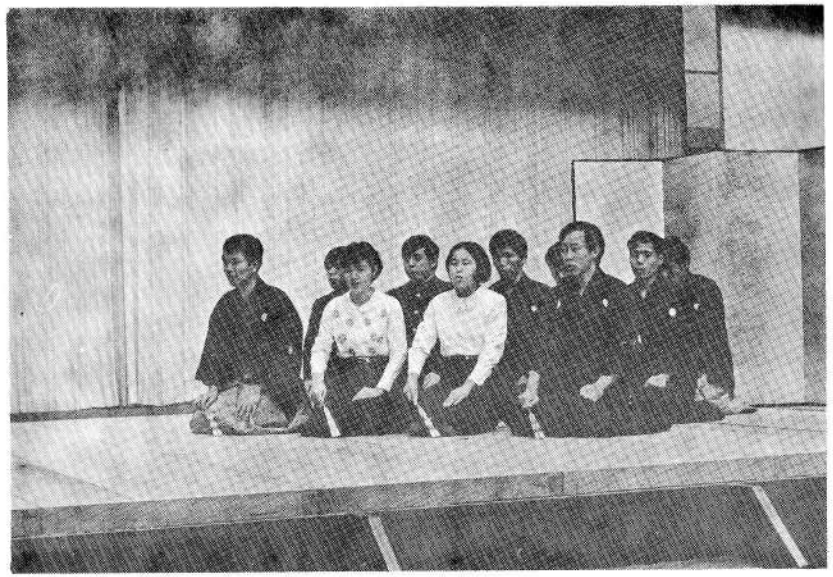
◎学生住所録……28

編集後記……29

五十年の体験（その五）

師範　宇　治　正　夫

稽古を始めて二三年は誰も余り大差ないものであるが、四五年又は十年以上ともなれば可なり優秀な人と然らざる人とが出て来るものである。その優秀な人というのは、ただ謡が上達するというだけではなしに、謡を通して人格が磨かれてくるということである。こういう人が現われると、この人をも一つ鍛えたらと教える者に特有な欲が出て来るものである。そうなると勿論利害関係等は全々離れて吾れ自身を磨くような気持になってくる。勢い教える者の思う様に伸びない場合にはあらゆる角度から八ケ問敷くなり、時には声も荒くなるというものである。時には教える者の気持が理解されず、双方の気持が喰い違って折角の苦心も水の泡となることもある。然しこれを徹底させずにある程度で中止して仕舞うと直ぐに崩れて結局勝れたものは出来ない結果に終ることは免れない。茲に双方に大きく言えば運命の岐路がある。これは例えば大きな山に登るようなもので、それ迄に何回か



第５回秋季発表会

第21回生新入部員

小さい山があってその度に教えるものにも教えられるものにも試練となって段々高い山に辿りつくようなものである。これは年数で言えば三年に一度位の割合で襲って来る。肝心なことは教えられるものがこの試練に喜んで当り、これを乗り越えて行く心構えをもつことである。

最近もある会に大役を勤められる人に稽古中今一息と言う処で何回も何回も繰り返し直して漸く曙光の見えかけた処で、この人が…「あんまり直されると嫌になる…」と言われた。十年前の私なら憤然として黙ってしまったであろうが、この時は即座に「今の言葉はいけません……先生にいろいろ教えて頂だいてどうしても出来ません。どうしたらよろしいでしょうか……と言い直しなさい」と言った所、その人も素直に言い直されたので私も気を直して前よりも一層きびしく直し、遂に満足の域に達した。投げ出そうとするときが最も気合がかかり、充実したときで、前の例で言えば一つの山の頂上に近づいた時なのである。これを乗り越えることによって謡も人格も一段高くなるのである。

謡と試験と会話

藤井　茂

一

故斎藤常三郎先生（神戸大学名誉教授、法学博士、破産法・和議法の大家、わたくしは学生時代に先生から民法を教わった）は、六十歳まで試験の夢を見ると言っておられた。先生のお言葉通り、わたくしも六十歳に近づく頃まで試験の夢を見た。しかも、きまったような問題が解けないで冷汗をかいている夢である。きっと身体の不調とか精神上の不安が往年の緊張感や不安感に連なるからであろう。

それにしても、試験から解放されて三十幾年も経って、潜在意識として残るというのは余程根深い意識というほかはない。目が覚めて追憶すれば、試験はさほど深刻なものではなく、むしろ問題に立ち向う闘志の豪快さと一つ一つ肩の荷を卸ろして行く爽快さがあったと思うが、そのいずれもが、真剣に試験に対応したことの盾の裏と表とも考えられないことはない。わたくしは学生諸君に講義を終了するに当って「人生は一本勝負だ。学生時代には幾度でもやり直おしがきく自由さはあるが、試験だけは真剣に立ち向いなさい」と言ってきた。こうした考え方の是非については論は岐れるであろうが、人間、とくに若い頃は時に真剣になって自分の真骨頂を試めすことは必要であると思う。

二

試験の夢が遠のいた頃からはこれに代って謡の夢をみるようになった。これもきまって舞台に坐って扇子を構えたが、さて一句も思い出せないという場面である。目が覚めてホッとすることは試験の夢と同じである。しかし、謡の場合には学問ほど真剣に打ちこんでいるわけでなく、その点から言えばそれほど根深い潜在意識となって残るとも思われない。ただ、稽古のときには宇治先生のお声を必死で心に刻み、晴れの舞台では素人ながら全心全霊をこめて謡うという心構えだけはもっているつもりである。これが往年学生時代に講義を聴き、試験を受けたときの気持ちに通じているのかも知れな

い。時に真剣になることが人間の発展にとって必要だという論法をもってすれば、夢にまでみる謡をもっているということは仕合せなことといわねばならない。たとえそれが絶句して冷汗をかく夢であろうとも。

三

謡の夢で絶句するというのは、結局は暗記することが苦しいということかも知れない。謡の暗誦というのは単に文章だけでなく節のはしばしにいたるまで一つの自由も許されないし、しかも謡っている途中で考える余裕はなく、ひとりでに謡えなければならぬところに、不断の練習が必要であり、時々思い出したように練習する素人にとっての苦労がある。若い頃に暗記したもの、何回となく会に出場してひとりでに暗記したものだけが残っていて、会の前に一夜漬けで暗記したものは大抵数日後には忘れて仕舞っている。この間の社中の会で、その前夜に宇治先生から仕舞の地に出るようにとの指令を頂いた。五番のうち二番はいつでも謡えるものであった。あとの二番は大体覚えていたので二、三回繰り返えしたら頭には入った。残る一番は遠いもので十数回繰り返えしたが当日不安のままで先生について謡うのがやっとだった。最初の二つは若い頃に覚え込んだもの、次の二つは幾度か積み重ねて頭に沁みこんだものであった。

暗記を繰り返しているうちに、ふと外国語の会話を思い出した。若い頃に覚えた語学の会話はその場に臨めば割合に話せる。少々年をとってから習った語学でも始終使っておれば、身についてくる。外国に旅して会話は若い時に習っておかねばとつくづく感じたが、この点では外国語も謡の暗誦と共通したものがあるようである。それにしても、これから後も、謡も会話も修練を積んで行きたいと年を忘れて意気だけは旺んである。

（昭和四十五年二月十一日）

〈先輩寄稿〉

学生の頃の想い出

J9　松岡誠夫

「風韻」がもう十号になる。もう、そんなになるのかと驚いております。創刊号の発行の時は宇治先生、藤井先生のお力を得て、先ず、会員名簿の整理から始まりました。大先輩各氏を直接訪問し、学生時代の記憶を尋ね、他会員の住所を捜がし、又御寄付をお願いしたり、卒業間際にやっと完成し、安堵したものです。

最近は謡の機会も少なく、せいぜい、テレビで能を見る程度になりました。関西を離れますと一層、関西がなつかしく、風韻会からの便りを戴くとどんな練習をしているだろうかと想像したりしております。

学生の頃は教育学部、文学部が住吉、御影と離れており、全員がそろうことも少く、練習が昼休みに限られていた為、六甲の男子学生ばかりでした。シニアに入ってからの本格的練習であった為、謡曲を理解する段階でなく、声を出すことが主な練習でした。それでも、風韻会はよくまとまっており、原氏を初め、山伏会のメンバーは健在で各界で活躍されており、誇りに思っております。

練習は毎日でしたから、上達も早く、自分ながら、上手にできたと思うことが段々多くなり、謡の虜になっていたものです。

コンクールには先輩が入賞した実績があり、やればできると云う自信がありましたから、四位になった時はほんとうに残念でした。残念会を上野山代宅へ押しかけてやったものです。今にして思えば当然の結果かも知れないが。と云うのは、謡にはストーリーがあり、各々の場面が理解されていたかどうか。

声で上手に形どっても、謡の心を理解しないと芸は完成しないと思うのです。流行歌手でも歌の心を歌います。謡の世界は歴史的にも古いですから、その時代の感覚、考え方、風俗を理解して、始めて謡の心が表現できると思うのです。学生の謡ですから、元気を、力強さを失ってはもとより何も残りません。

第一に声を出すこと、第二に謡の心を理解することに心掛けて、練習に打込んでもらいたいものです。一つのものに打込み、辛苦の末に完成させる努力こそ、社会が求めるものであると思います。自分ができなかったことを後輩に託す心境になった我が身をはじらいつつ。

大学紛争は当然である

E11　井上文男

大学紛争も経済学的に見ると、教育という商品を売手（大学側）が、独占的に押売りしてきたことに対する買手（学生）の反対運動と把えることができる。

売手は商品の販売に関して二つの誤りを犯してきた。一つは、商品設計の誤りであり、他は販売手法の誤りである。先ず商品設計の誤りとは、戦後に急増した大学生に対しても、戦前の場合と同様に「大学とは真理を追求する場である」といった、現世離れした象牙の塔的な態度を要求したことである。「真理」なんて言うものは四年間の在学期間で追求できるものであるのか。否、教師ですら一生涯かかっても追求しきれず、不幸にして結局は外国文献翻訳業者に終ってしまうことすらあるのである。現在の大学生の九五%までは頭脳労働者としての総合的能力開発を期待して入学し、残る五%ほどは学究の徒としての道を歩もうとしている。この五%に対しては象牙の塔的な教育でも良いかもしれないが、大勢の学生に対しては学ばねば自分が損をすることになる教育をするべきである。それはどんなものか——①学部としての常識（経済学部生なら物価のことが判るとか）②社会人として役立つ実務（英会話・簿記・統計）③社会人に必要な「分析し考える態度」の訓練の三種類の内容があろう。現在の大学は③を指向しているようだが実は①だけを教えているように思える。事実、大学卒業生は在学中に得る処がなく、企業中訓練を受けて一人前となる。文科系卒業者で特技を持たない者はホワイトカラーを着込んだ肉体労働者としての地位を保っているにすぎない。

販売手法の誤りは講義の場においてその例を見ることができる。たった二・三冊の本を六ケ月もかかって講義したり、ノート講義という速記練習みたいなことをしたり、或いは毎年講義内容が同じであるとか、休講しても代講が無いとか、更には予習を義務づけて講義の効果を高める訳でも無ければ、レポートを提出させて理解度をチェックすることも無い。時には講義に出席しなくても「優」をとる者がいたりして、およそ教師と学生が教室という場に集まる意義が無く、テレビ大学の方が生産性が良いと思われる現状である。「教育とは法悦境に到らしめる道である」と述べた人があるが、能力のある学生に真の教育をしない現在の形骸化した教育方法が改革されるのは当然のことであった。

然し大学問題はここで終らない。非経済学的側面、即ち政治的側面も持っている。日共系と反日共系の対立といった類の問題は本来大学問題と関係がない。彼らがプレジネフや毛沢東になり代って日本の教育体系を論じようとする処に問題がある訳で、従って彼らがまき起す暴力事件はそれが大学構内の内外を問わずビシビシと取締るべきである。言うなれば彼らは外国人であるのに、日本人と同じようなつもりで扱おうとして手を焼いているうちに、大学が都市の最大の武器製造工場や暴力団員養成場と化してしまったのではないか。

最近神戸大学でも収拾がつき始めたと伝えられるが、新聞でも「凌霜」でも学生が暴れたとか胸像が損壊されたとかいった末梢的なことが報道されて、真の紛点は何でそれがどのように解決したのかが書いていない。狼ぜき沙汰が無くなるのは結構なことではあるが、政治的には重要でも経済学的にはクダラナイ問題が解決したことで当事者達が満足しているのであれば、この教育革命は失敗と評価せねばならないであろう。そうでないことを祈るばかりである。

妄言多謝

（日本ペイント㈱社長室勤務）

先輩便り

ここでは、日常の発表会等のお知らせの御返信等の中から、適当なものを選んで掲載させて頂きました。

○牧沢　善三（旧姓中川）昭和十五年卒

残念ですが出席できません。風韻会が益々発展してゆく姿成を知って、衷心より喜んでおります。当地は宝生流一辺倒で、観世流の者、殆んど見当らず、寂しい限りですが。宇治先生が、道成寺披きの際戴いた扇子成、時々とり出して当時の思い出にふけっています。宇治先生に呉々も宜しく御伝え下さい。

（金沢）

○近藤　哲久。八千代

毎回御案内を戴きながら、遠方のため出席できず残念です。当方、一女（八ケ月）を含め、元気に過している旨、宇治先生、藤井先生に御伝え下さい。

（大分）

○米田　勝美（旧姓川上）昭和四十二年卒

御盛会をお祈り致しています。この九月六日に女児を出産しました。新米のママさん稼業と勤めで、会には失礼します。御出席された先輩の方々によろしくお伝え下さい。

（神戸）

○五十嵐勝三

十一月十一日、結婚式のため、おそらく行けないと思います。式場は高槻市市民会館、時刻は正午です。

（高槻）

○原　敏郎

我々三十六年風韻会卒業生は、「山伏会」という会を作っている。大学四年の秋、湊川能舞台での宇治風韻会に「安宅」の同山——十一人の山伏——に出演したのを記念してつけた名前である。来年は卒業満十年になるので、五月頃、六甲山頂で一泊二日の宴をもちたいと計画中である。気がねなくさわげる場所を御存知の方は、御紹介頂きたい。現在唯一人の独身、福光君もその頃は吉報をもたらしてくれるものと思う。

（西宮）

「蟬丸」に思う

L19　武田京子

何故か、私は蟬丸に縁があるように思われる。合宿でも二度習ったし、その仕舞も会で舞ったことがある。しかし、その練習の度合の多さというよりも、私がこの曲に心をひきつけられたのは、能にしては珍しい、うす暗い情景と、ひしめく人間の悲しみのためである。その暗さとは、この時代の社会が落としたもののように思われる。そして、それがいわゆる能で表現されるような美学的な暗影の中に、美をみつけるというようなものではなく、その影自体が、悲惨なにおいをただよわせているし、又、その中に住む人間の悲蒼なひびきが接する人の心を沈ませる。つまり他の能（といっても私はあまり調べたことはないが…。）と一番異っている着想、それは、社会に流れる陰惨な部分へ能をアプローチさせていることではないか。人間の陰惨（仏法でいう〝業〟に苦しむ姿）を画いたものは多い。しかし、「蟬丸」において、作者（世阿弥元清）は、社会のはなやかさから、置きざりにされた人間に焦点をあてている。人間そのものの、どうしょうもなさよりも、その人間に押しよせる周囲の残忍さを感ぜずには、おれない。いわば、社会の中心部分より〈疎外された人間の悲しみ〉が暗い調子で主題になっていると私は思うのである。普通、一般的概念として、能は、その幽玄でもって、観る人、聞く人を酔わせるものだ…と思っている。しかし、この曲に、人を酔わせるところがあるだろうか。そのことについては、後に書くとして、まず人は、この曲を観て、悲惨のみと思う。社会の一つの断面を見せつけ、能にしては奇抜な設定を行ったところに、私は、作者の大胆な試みを感じとる。そして、その中にこそ、人間の真実が求められるのではあるまいか。

もし、この曲の主題を、〈疎外された人間の悲しみ〉とするならば、それはいかにして表現されているだろうか。まず、最初その想定から私なりにみてゆきたいと思う。シテ（逆髪）ツレ（蟬丸）とも皇室の血をひくものである。が、一番社会からもち上げられていたはずの皇室という当時のイメージとの対照がこの二人に強く印象づけられている。皇室という社会機構の最上位に位置し、一般的には、社会の窮乏から隔離されたところにおいてさえ、一つ生まれそこなえば、このような悲惨な現実が待っている。皇室を背景に、盲の蟬丸、髪のさかだった狂女、逆髪という異常な人間の様相が、この対照において、効果をましている。まさか、能の中に天皇制不信をばらまくよう意図することはないと思うが、この皇室の中における悲哀は、何よりも光のあたらぬところへ人間をおいて、全体に暗さをゆきわたらせたがっている、作者の意図したところのものだろう。能特有の王朝的ムードを廃し、それを裏がえしに作ったような気がするのである。蟬丸・逆髪の出会いの場が都より遠く離れた逢坂山の山奥の藁屋であり、蟬丸が捨てられた状態であることが、如実にそれを象徴しているのである。きびしさを越えた残忍さを感じる。

この想定は、全く作者の想定したもので、何一つ歴史的根拠をもっていない。二人が皇子や皇女であるのも虚であるし、逆髪の様も作者の作りごとに他ならない。写実主義に端を発した能がこのようなフイクションにまで致ったことの理由を私は前に、作者はあえて虚をついてまでも、残忍な場面に能芸術の照明をあてて、人間のかなしみを表現したかったのではないかと書いた。しかし、ここで、考えなければならぬのは、能芸術と切りはなして考えられぬところの仏教思想である。私は、どの程度能の創作が仏教思想に支配されたのか知らないが、常に能のプロットがこの思想の流れの中にあることは、一見してわかる。そして、この「蟬丸」の場合も前世の宿業を強張したいため、すなわち、仏教的思想に合致させ得るような人間にしたてたいために、二人をこのような想定にしたと考えるのが通説らしい。つまり、狂乱や二人の悲しみを宿縁的因果のおしえの材料にするというのである。しかし、私はそれがたとえ、立派な理にかなうものであっても、あくまでもこの二人を我々と同じ世界におきたいし、このかなしみを我々が日常背負っているかなしみと同じ次元で考えたいのである。

二人の姿をもう一度思い起してみたい。蟬丸は、そのために宮中なら追放されるような盲の身であり、逆髪は自分でも驚くような醜女である。普通こんな容貌を呈したかたわの二人を頭に浮べた場合、第一に目をそむけたくなるような醜くさ、グロテスクな様しか脳裡に映らない。しかし私はこの曲を観て、残忍さこそ感じ、醜くさは感じない。そこに能が能である所以の本質があるのではないかと思う。通常生活にみられる醜くさを如何にして、美の中に内包できるか、その問題を受けとめるところに能の世界があり、能創造における美への昇華があるのだと思う。

もし、かなしさ、残忍さに美があるならば一体この「蟬丸」の曲は、何をもって、美に変え得たのか、そして私を感動させたのか、気の付く個所を拾ってゆきたいと思う。しかし私は、能における美（もちろん幽玄が意味するものと深くかかわっていることにまちがいはないと思うが）について、ほとんど知識認識がないので、感動したといっても、能の美の本質によって感動したかははなはだ疑しく、ひとり合点なところも多いと思うけれど内容面の暗さ、情景のみじめさをのりこえて何か私を美しいと感じさせずにおれなかった点について書いてみたい。

まず私は逢坂山（これは後の逆髪との出合いを予期させる名称である）に捨てられた蟬丸の姿に何よりもおわれさを感じる。自分の盲の身を前世の成行が拙ないせいだと思い父帝に対して何のうらみごとも言わない。逆に後の世を助けんための御はかりごとだといって親の慈悲とする。しかしワキとのかけ合いの最後には、はっきりと「父帝には」「捨てられて」と言いきり、抑えていたかなしみを暴露させている。自分へのあわれさと父に対するうらみをかみころし、あきらめに似た悟りの気持で山籠りを決意する。つらさとあわれさが満ちあふれた姿の表現が切実さを伴っている。頼みにするものが杖一つでそれを杖柱と言っているのも、いかにも蟬丸の境遇を象徴したもののようで調和を感じとる。そのような姿で、琵琶を奏でるのだが、琵琶という楽器が高貴な印象を与え、蟬丸のあわれな境遇に共唱するものとして、かなしみの中に繊細な美しさがある。

蝉丸の姿について思うもう一つのことに、逢坂山の情景描写がたくみで、蝉丸と微妙に融合しているということである。「盲亀の闇路たどり行く、迷いの雲も立ちのぼる逢坂山に着きにけり」修辞技巧もさることながら、迷いの雲を、蝉丸の盲にからませ、さらには蝉丸の心境をも映しとろうとしている。このように象徴的な萩藁屋の中に蝉丸を配置させたり、自然の中に、あわれな蝉丸の心情をおき換えたり、又琵琶の音を想像させたりしているが、このような個所に現実を超越した能の美的感覚への浄化があるのではないだろうか。

蝉丸と逆髪との邂逅は現実的に考えれば、ひどく不自然なものに思われる。多分作者は変な理屈を通さずに、ずばり師弟の愛情の場面を展開させたかったのだろう。名のりをあげる逆髪のことばが強く私のことばをとらえる。これは恋に破れた狂い方ではなく、子を失った狂い方でもなく、生まれついた狂いである。特に注目したいのは、髪がさかさまだということについてはげしく弁明するところである。自分をあざ笑うわらべに向って自分の考えをするどく訴える。この様はそばで見ていると如何にも彼女が狂女ぶりを発揮しているように見える。しかしもしこのことばの中に作者自身のことばがあるとするなら、逆髪を借りて何かを述べているようにも思える。それを要約すると、「わらべよ、お前が私のことを笑うことの方がさかさまなのだ。どちらが順でどちらが逆かわからないことなど世の中にはいくらでもある。規準が異ることによって順逆、上下も変ってくるのだ。」ということにもなろうか。つまり、自分の髪がさかさまだというのを、普遍化しているのである。良しとされることでも他の面から見ると悪しとされ、真実なんてものはどこにあるかわからない。当時の王朝の時代に流れた文化の絶対性を皮肉って、相対性の強調を示唆するとみるのは余りに類推しすぎることだろうか。しかしとにかく作者の人生観のほとばしりが少しは入っているように思える。それが狂女の狂い声ゆえに、独得のひびきをもつのである。このように、逆髪は自分の身について狂い述べた後、狂女であるが、心は清滝川であることを認めてほしいと、地の文句で謡わせる。身のあわれさと心の痛みをあますところなく表現している。ここにくると、逆髪の意識は正気に戻り、自分をあくまで狂女とみとめ、対象化した上で、自分の姿を観照している。特に、自分の逆だった髪を走井の影に映しているその姿は、やはり醜くさを超えてあわれに連がる美を感ぜずにはおれない。醜い姿を水に映し、その驚きを表現するところにも能のもつ内面描写の巧みさが伺われる。

次に蝉丸と逆髪との出合いの場であるが、ここに致って、今まで沈んでいた気持が一揮に高揚する、クライマックスの場である。蝉丸の弾く琵琶の音を村雨の中で耳にし、静かに聞きいる逆髪と、秋の風の中に琵琶の音を放っている蝉丸の姿が一つに調和する、その配置が両者の関係を簡単ではあるが、端的に物語っているのである。その圧縮された象徴性に、東洋的発想を感じとることができる。そのあと、二人のさびしさへの情と不遇どおしの肉親への愛情がどっと発散するのであるが、その情景を「峯に木伝う猿の声、袖を湿す村雨」とし、その風画が二人のあわれを助長する。特にクセ謡は、高貴な身分のものどうしが、山奥に捨てられた場所で、巡り合い兄弟愛を展開する場面の説明であるが、場所が場所だけに、愛情がいたく、聞き手の心を刺すのである。そして都のみやびやかさからはなれたわびしい場で、飾り気のない人間の真実の情感が発露するところに私は悲常な共鳴を覚えた。

能が観衆を打つ美は、登場人物が如何なる人であろうと、象徴化簡素化された姿、動作の視覚美とその背後を流れる謡の聴覚美との調和でもって曲想が作られるところにもあるのではないだろうか。

以上能楽について専門的研究知識や定まった能への考えなしに思いつくまま、感じるままに「蝉丸」という曲の感想を書いてみた。まとはずれや、ひとりよがりや、見当はずれた理屈や指摘が大部分だと思うが、どうか許していただきたい。能にはこのように雑然としたとっつき方のほかに、いろんなアプローチのしかたがあると思う。芸術的アプローチ、文学的アプローチ、音楽的アプローチ、歴史学的アプローチなどなど。もちろん総合的な見方が望ましいと思うけれど、他の古典を処うのと同様、まず、現代に生きる者であるという視点を忘れずに接することが、肝要ではないかと思うのである。

陸奥雑詠(一)

あれすさみ乾きし心慰さめよ奥の細道今日旅初めん

五月雨の杉の木立ちの月見坂思いはめぐる今は昔に

（侃）

大学近況

○ 大学紛争も一応の終結をみ、今迄の遅れをとりもどすための追込み授業に忙がしい毎日で、後期試験も三月中旬から下旬に実施されます。大学改革は、まだまだ端緒についたばかりで、具体的な構想は、まだまだ明確ではありません。今後の成行を見守ってゆく必要があるでしょう。

○ 昨秋、当大学経営学部、丹波康太郎教授及び山下勝治教授が相次いでお亡くなりになりました。心から御冥福をお祈り申し上げると共に、先輩各位に、慎みて御通知申し上げます。

○ 風韻会顧問としていろいろお世話になった、教育学部、松原貞吉教授が、本年をもって退官されることになりました。永らくの間、ありがとうございました。心から御礼申し上げると共に、先輩各位に御報告致します。なお先生の歓送謡会を、本年度卒業生歓送謡会を兼ねて、三月八日に開催することになっております。（編集部）

平家灌頂巻

B18　菊地　侃

一

平家物語は、私のこよなく愛する書物の一つである。私が謡曲をやりはじめ、能に興味を持ち始めたのも、この故であったように思われる。実に多くの謡曲がこの物語に取材されている。敦盛、忠度、経正、清経等々の平家の公達はもちろんのこと、妓王、千手、小督等々数えあげればきりがない。これは、平家物語が、能作者に如何に深い芸術的感動を与えたかを物語っていると考えるのである。いうまでもなく、平家物語は、我国戦記文学の雄編であり、平曲として琵琶法師に語られつつ、その全貌を整えてきたものである。その雄大にして、かつ繊細流麗な和漢混淆文は、えもいわれぬ哀調を帯びて心に浸み透るようである。私はこれを「夕日のうた」と呼んでいる。ここに述べようとする「平家灌頂巻」は、謡曲「大原御幸」に、内容のみならず詞章までも取材されているのである。

二

今日に伝わる平家物語の伝本は、十三巻又は十二巻からなる構成をとるものである。即ち、八坂流の語り本系統のものは、十二巻であり、一方法の語り本系統のものは十二巻の他に、灌頂巻一巻を立てて、十三巻となっている。しかしながら、この二者は、その構成詞章の上に根本的な相違をもつものではない。灌頂の巻に相当する内容が、それを持たない伝本の中には分散して存在しており、これをまとめて灌頂巻を特立した意味は、主として平曲伝授上の便宜によるものといえる。しかしながら、より積極的には、多くの短篇を一本の糸により合わせ、長篇としての統一感を与えるために、冒頭の一節に相呼応させようとする構成上の知的態度のあらわれとみるべきであろう。

平家物語は、最初から灌頂巻に記された内容をもって終結すべき構成をもっていたのであり、灌頂の巻の存在は、本来の形として認められて然るべきであろう。

三

平家物語は天承元年平忠盛の得長寿院造営のことに筆を起こし、平家の嫡流六代御前誅のことに至るまでの、約六十年間が取扱われている。平家灌頂巻は、巻十二の後を承けて、建礼門院のことを述べ、この長篇に見事な終結を与えている。「灌頂」とは、密教に於いて、伝法授戒のとき、又は修道者が一定地位にのぼるとき、頭に香水を注ぐ儀式のことであるが、第二義的には、極意や秘法を授けることを意味する。この灌頂巻が特立されたのは、平曲伝授上の便宜によることから考えれば、ここにいう「灌頂」の意味は、平曲伝授に際して、秘事ないしはそれに近いものとして重く取扱われたことを示すものであろうと思われる。

四

平家物語の冒頭は、余りにも有名である。「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顕はす。奢れる人も久しからず。ただ春の夜の愛の如し。猛き者も遂には滅びぬ。偏に風の前の塵に同じ。」そして、この人生の無常を告げ渡る鐘の音と、盛者必衰の理を示す沙羅双樹の白色の花とは、平家物語全篇の基調である無常観の象徴として、物語のあらゆる所で、耳に響き、眼にうつる。

ここで、平家物語の無常観について一言述べておきたい。諸行無常とは、元来深遠な伝教哲理を説くものであるが、この物語に於けるそれは、「……こそあはれなれ。」の語句が随所に見られる如く、非常に抒情的な、感情的なものであることに注意すべきであると考える。このジョウジョウと響きわたる鐘の音は、灌頂巻に至って、「さる程に、寂光院の鐘の声、今日も暮れぬと打ち知られ」静かに静かに、その響きを止め、建礼門院の御往生と共に、「西に紫雲たなびき、異香室に満ち、音楽空に聞ゆ」る極楽浄土の彼岸世界を暗示しつつ、この物語は幕を閉じている。

五

この灌頂巻は、源平の合戦こと終り、六波羅の栄華は遠くはるかな夢となり、平氏の公達はことごとく海の藻くずと消え果てて、残された平家の血縁は、建礼門院徳子ただ御一人。女院は生ける屍として、洛北は大原の寂光院で、仏に仕える身として毎日をおすごしになる。そこへ、後白河法皇は夜を籠めて御幸なる。ここに、平家を代表すべき女院と、平家追討を命ぜられた中心とも考えうる後白河法皇とが、今は愛憎怨苦を越えて、親しく静かに仏の寂光につつまれながら、今は昔の物語を交される所を描いた巻である。

灌頂の巻は、女院御出家のことに始まる。女院は「今年廿九にぞならせ給ふ。桃李の御粧猶濃かに、芙蓉の御容未だ衰へさせ給はねども、翡翠の御髪さし附けても何かはせさせ給ふべきなれば、遂に御様を変へさせ給ふ。憂き世を厭ひ、実の道に入らせ給へども御歎きは更に尽せ」ぬ御様子であった。時に文治元年五月一日。

ところが七月九日、大地震がおこり、荒れ果てた御住居は、更に傾きて、もはや住みようもない。かくて女院は、「山里は物の寂しき事こそあるなれども、世の憂きよりは住みよかんなるものを」と思し召し、或る女房の進言によって、大原の奥深き寂光院へ入御なる。寂光院のかたはらに、方丈の御庵室を結ばれ、昼夜朝夕の御勤め、長時不断の御念仏に月日をすごされる。

このような所へ後白河法皇は御幸なる。女院は「さこそ世を捨つる御身といひながら、今かかる御有様を見え参らせんずらん恥かしさよ。消えも失せばや。」と思し召しながら、泣く泣く見参された。こうして、いよいよ平家灌頂巻の中心をなすとみられる「六道」の章に入いる。

六

「六道」とは、仏教の教える地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天上を意味し、女院は、ここに、その生涯をこの六道になぞらえて語り給うのである。

即ち、平相国の娘として、天子の国母となり、一天四海皆掌中にあり、明け暮れ楽しみ栄えしことを天上の果報に、寿永の秋の初めつ方、義仲に都を追われた愛別離苦、怨憎会苦を人間苦に、御調物もなく、水もない船上の住居を餓鬼道の苦しみに、一の谷の合戦など明けても暮れても軍よばひの声絶えぬことを修羅の闘に、壇の浦の合戦に先帝入水のことを地獄に、さては捕われの身となり給いてよりの月日を畜生になぞらえ給い、「これ皆六道に違はじとこそ覚え侍へ」とお語りになる。

ここに平家物語は、その十二巻にわたって語り来た平家興亡のあとを、仏教的教義に照して、再び反省させていると見ることができよう。また随所にみられる因果律による構成は、この灌頂巻においては、全篇をおおうより大きな因果律となって、平家全篇をまとめあげている。即ち曰く「抑壇浦にて生きながら捕はれし人々は、大路を渡して首を刎ねられ、妻子に離されて遠流せらる。……これはただ、入道相国一天四海を掌に握って、上は一人をも恐れず、下は萬民をも顧みず、死罪・流刑思ふ様に行なひ、世をも人をも憚られざりしが致すところなり。父祖の罪業は子孫に報ゆという事疑ひなしとぞ見えたりける。」

かくて女院が往事を語り終わられ、夕陽西に傾きて名残り惜しさにむせびつつ法皇は還御ならせ給う。時おりしも、「寂光院の鐘の声、今日も暮れぬと打ち知られ」さしも響きし無常の鐘も、今その響きを止めなんとしている。六道の苦しみを目のあたりに御覧になった女院は、ほどなくして、阿弥陀如来の引摂によって、この迷いの世界を去られ、「西に紫雲たなびき、異香室に満ち、音楽空に聞ゆ」る奇瑞の中に、西方極楽浄土の世界に往生し給うのである。時に建久二年如月中旬。

七

平家灌頂巻を述べることは、平家全体を述べることに等しい。私の能力をもってしては不可能であることは論を待たない。このようなことを、私が敢えてしたのは、私が平家物語を愛するが故であり、また謡曲をやる人興味をもつ人には、是非とも読んで欲しいと思ったからである。平家物語は、叙事詩の一種であろうが、これを貫いて流れている無常の情感は、能における幽玄に通うものがあると思われる。

年の矢の早くも過ぐる光陰、惜しみてもかへらぬはもとの水。寒風吹きすさぶ冬のさなかにも、日一日と春の気がしのび寄って来る。淡雪は降れども積もることもなく、梅は静かに笑みの眉を開く。もののみな輝ける春の訪れを前にして、もはや卒業の時を迎えた。先輩諸兄は去りて久しく、同輩五人は今新しき門出にあり、後輩諸君は、私にとりてはうらやましくもあるか。一方に沈みゆく夕日に対する限りなき哀惜の情を抱き、他方に昇りゆく朝日に対する大なる希望のあふれくるを知る。

闇の中の私

B18　菊地　侃

私は眼を閉じた。
光はさえぎられた。
闇。墨汁の液。
その中に私だけ。

私は静かに横臥する。
無限に広がる単調な平板の上に。
固く冷たい岩盤の上に。
私は全信頼をその上におく。

見よ！
瞬時の白光、糸を引く。
分断された闇。

突如、私の横臥しているものが沈む。
沈む沈む沈むどこまでも
深い深い深い闇の淵へ

墨汁の奥底へ。
そのスピードに私の横臥しているものが
消えた。
溶けた。
無くなった。

私は仕方なく浮遊する。
墨汁の中を
ずいーるずいーる
ぢゅぶりぢゅぶり

そうして私も私も溶けてゆく。
墨汁の中の乳汁のように。

私の命は、
私の魂は、
どこかへ行ってしまった。
もはやなかった。

乳汁となった私。
私は銀色。私は吹雪。
舞う舞う舞う。

方向のない
時間のない
闇の
無の
空の
虚空を浮遊する。
ただ浮遊する。
いつまでも
いつまでも
オーケアノスの大洋に

陸奥雑詠(二)

絶壁にふるえて咲くは浜百合かあわれ御身を守るものなし
白砂に硫黄の臭気恐山宇曽利の水は余りに青し

(侃)

本とレコードと
コーヒーの店
宝盛館本店
阪神御影駅南
TEL(84)1145代

お茶漬
お好焼
おきな
(P20 中村久美子)
水道筋
電話(80)2377

純喫茶エリーゼ
Elise
<団体予約うけたまわります>
神戸・阪急山側<三映前>電話(33)1255

「ある風韻会人の呟き」

E18 中島克巳

どこのオッサンやろか、あの人、老けた先輩やなあ、声出すの楽しいけれど足しびれるし声も枯れて苦しくなるなあ、あの人きれいやなあ、けど、オゴッてもらえるし、楽しい人多いしええクラブ入ったなあ僕、――一年のある日ある時部室にて――

今度の新入部員、皆傑作やなあ、ジュニア合宿でええカッコしたら、ああ、もうこのクラブで一年か、まったく早いなァもう、こらっ一年、ちゃんと座らんかいな、けど四年と三年の先輩達が目の上のなんとやら――二年の春、学生服姿の新入部員を前にして

幹事いうて阿呆臭い仕事や、ーしんどいー気ばっかり使うて。謡い、どうしてうまくなれへんのかな。今からしっかりやろ。あ、あいつら又騒いでる。畜生、もう三年か、金ないけど又、入船へでも行くかなァ――三年のある日夕暮れの部室にて

勝手にしやがれ、もう卒業間際か、取り巻かれて勧誘されたの、この前みたいなのに、憎たらしいけど、この上なく愛すべき後輩、思い浮べるだけでは性格がにじみ出てくる先輩達、それにしても時勢にゃ勝てない。ま、これも良し、でも、どうして俺、ボケッとしてたのにクラブやめる気だけは起らんかったんやろか、大体が鈍感なのかも知れん。次の合宿でジェンドか、もはや長老とかなんとか。社会に出れば又、一年坊主に逆戻りか。よし、やったるで。

――四年のある夜、寮の自室にて

異様な静寂が〈世界〉を支配する。

〈日常〉から〈非日常〉への量的な〈運動〉は、質的に発展転化する。〈情況〉を貫徹する〈無形〉の全体的収奪に包摂された〈自己〉を認識するとき、真の〈運動〉が始まる。〈運動〉とは、〈本質的普遍的なもの〉を根底的に問いつめる過程そのものに他ならない。そしてそこから〈常識〉を超越したものとして〈自己表出〉の論理が創出される。

〈情況〉の内円としての〈日常〉の告発は必然的に〈幻想共同〉への謀叛の烽火を準備する。そして一切の〈ことば〉の擬似性が否定され、〈パルタイ〉への忠誠が崩壊する。

〈無〉に対する総体的な〈叛逆〉、そのような突出した〈非日常〉にあってこそ真に〈自己〉が確証され、〈ことば〉は対象化された真の客体として主体に止揚される。

全ての〈死せるドグマ〉は葬り去らねばならない。

(P18 今宿純男)

風韻会での思い出

T18　小川忠彦

私が風韻会に属するようになったのは、大学のサークルの中で自分に出来そうなものがなく、何処に行くべきか迷っていた時「大学に入って始めた者がほとんどである。」という一文にひかれて、六甲台グランド南側、両端のサークル部室へ「入部したいんですけれど」と一人で顔を出したのが最初である。日記によれば昭和41年4月18日（月）のことである。（この日の部室使用が宝生会でなかったことを幸いと思う。）どういうことをやるのかも説明してくれずに、いきなり畳の上にすわらされて、「僕と同じように謡って下さい。」と安藤さんから言われた時には、しまったと思った。（大声を出して、音を操つるなんて音痴の私には不可能に近いと思われた。）立派な声を目前にして、恥かしいやら、気後れやら、圧迫感やらで、本の字もろくに見ていず俯き加減で頭を左右に動かすばかりで、「鶴亀」の「躍を接いで」を「キビスを接いで」とやら、その他多く読み違えするばかりで全然声にならなかった。ともかくも、入部したからには苦しいことがあっても続けようと決心する。

しかし、その後、勉強する気もないのに、さぼるだけの勇気も持ち合わせず、ただ時間の空費と尻をさするだけの講義に出席して、即帰宅するという生活を送っていた為に、六甲台の部室にも教養の部室へもあまり練習に行かなかった。（昼飯を優先させたので、昼休み、教養の部室へ行く時間的余裕も少なかった。）その為、ジュニアー祭で「竹生島」のシテ役を当てがわれていながら、シテ不在で全員揃って練習が出来ないという事態も起った。同輩が練習によって上手になり、自分だけ取り残されたような感じを受けている所へ、無理に声を出して風邪をひいたことも手伝って、風韻会が呪わしい存在に思えたのが、一年半前の事であった。ジュニア合宿・誕生寺での夏合宿・秋季発表会、そして春の南部の合宿を経ても謡曲を少しも面白いとは思わなかった。やっと興味を持ち始めたのは、二年になってからのことである。

私の風韻会における活動というのは、教養の後半と、専門課程の前半の二年生時代にすべてが集約される感じである。この時期に教養の部室で一人練習したり、先輩にも多く教えてもらった。それ以後は、時たましか顔を出すことしかでききくて、声をはりあげてみても、非力、むなしさを感ずるだけで、真底から謡曲、仕舞に溶け込むことができなかった。本来ならば、このままの状態で終っていたであろう。ところが、大学紛争で講義がなく、時間的余裕が出来たので、不可能と諦めていた部室通いを続けることができた。旧三商大合同謡会・四大学交歓会・熊野本宮での合宿も同様に参加することができた。大学紛争が私をより風韻会に近づけたわけである。

ともかくも、風韻会にはいってここまでやって来た。サークル活動を続けて行くには何らかの要因が要求される。風韻会においては、謡曲・仕舞・舞囃子への憧景・魅力・味わい深さ・陶酔といったサークル特有の内在的因子と、コンパ、先輩、後輩との飲み屋での語らい、喫茶店でのダベリング、大学問題に関する討論といったものを通じた心の触れ合いという外在的因子、の二つがあげられると思う。私がここまでやってきたのは、一つの活動をやめずに続けたいという男性的メンツと先輩の思いやり、風韻会の持つ雰囲気によってであった。自ら謡曲・仕舞を求めて積極的に加わっていったというのではなく、大学生活のむなしさを埋めるための一つの場という感が非常に強い。このことは、専門課程に進学してから特に強く感ずる。即ち、多分に外在的因子が強く、謡曲、仕舞の練習に打ち込み、内在的因子にふれるということなく終ってしまった。それでも、風韻会のお蔭で、能も見れたし、その一部に触れることもできた。良き伴侶となり、工学的見地とは異なった観点からの洞察を与えてくれたと思う。現時点における評価というものよりも、何十年か先に振り返ってみた時にこそ、風韻会の真の良さが感じられるのではなかろうか。今となって、鮮明に映像が浮かび上がってくるのは苦しかった思い出だけである、ふつつかな私をここまで導いて下さった宇治先生をはじめ、先輩諸氏に感謝するとともに、後輩諸君に対しても、苦しみこそ真の生甲斐であると思って頑張って頂きたいものである。

陸奥雑詠（三）

幾千里闇をつんざく黒崎の燈台の灯よ何処を照らす

北洋の波に砕けし木造船しばしやすらえ八戸港

（侃）

〈随筆〉

連絡船

E19　根岸義明

私が四国徳島の南のはずれ、日和佐にクラブの合宿の下見に行ったのはもう一年以上も前、大学紛争もまだ本部封鎖されたものの、どこか別の世界のことのように思っていた頃のことです。そんな前のことなのでちょっとしたメモを頼りにしてしか、その頃を振りかえることはできません。ただ、その下見旅行の連絡船のことが今でも瀬戸内の海に日の沈むのを見ると、鮮明に思い出されるのです。

四国と本州を結ぶ連絡船といえば、私には別府航路のどこか明かるい船旅として、瀬戸内の島々の間をぬって行くものというイメージがあります。そんなつもりで、いっしょに下見に行った田中と別れて、宇和島十四時十分出航、神戸着十八時にのったのです。

荷物を二等船室に置くと甲板に出ました。その日は十二月半ばというのに、春のひざしを思わせました。近くにせまる四国の山々、そして小さな湾をぼんやり眺めていました。ドラの響き。出帆です。でも、テープ一つ宙に弧をきりません。再びけだるいドラの響き、そして汽笛。季節はずれの船。遠ざかる岸壁には人影はまばら。広いコンクリートのふ頭が白くひかっていました。それでも私には十分。白い航跡、そして南に広がる紀伊水道。かなたは太平洋。一人甲板の上で豊穣の太平洋の浜を思い出していました。そんなとき、

急に楽しそうな話し声。私の存在を無視する様に二人づれは写真を撮りあい、そして口づけ。何という道化役。急に北風が吹いてきました。

二等船室にもどると、もう常連はパッチ姿で酒盛の最中。あれはどうやら大阪商人。毛布でくるまって寝ることを決め込んだおばちゃんたち。中年の御婦人は目の前でスカートをお替えになる。シミーズの白さ。少し離れて農家の人たちがこれまた車座になって騒いでおられる。右の方には赤ん坊をあやしている色黒いからだのがっしりしたおかあちゃん。私は明日の大学の試験のためのべんきょう。そのうち、さっきのお二人さんがはいってきた。〃おたのしみでしょう。でも、二等船室に乗るなんてまぬけですね。いや、二人なら回りはどうでもよい？これは失礼。〃

私は再び甲板に出た。船は紀淡海峡を通っていった。寒い。かもめもいない。かすかな日だまりでからだをあっためる。でももうすぐ日没。船が揺れる。私は日が淡路島の山の端に沈むまでふるえながらみていた。オレンジの冬の夕焼け。

船室にもどると静かになっていた。酔いがまわっていびきをかいている商人。例のアベックも毛布にくるまっている。皆んなごろごろしている。私も、まわりの話声を聞きながら毛布にくるまって寝よう。

さっきのお母ちゃんも、赤ん坊が寝入ったのか、毛布をきちんとたたんで、その上に寝かしている。子守り歌でも口ずさんでいるのか。そのうち、隣りにおるヨレヨレの背広を着た安サラリーマン風の若い男と話しはじめたようだった。

「女の子ですか。かわいいですね……。」

「あんた、子供、好きなんですな……。」

「……。」

「この子、わたしの子じゃあらしまへん。……。」

（？）

「この子、死にそこないなんです。……。」

（！）

「ようありますやろ。この子の母親、男に捨てられましたんや。それで、まあ、おろしたんです。……。そやけど八ケ月やったさかい、生きてましたんや。……。男はどこへ行ったか、わからしまへん。母親というたかて、まだ二十前。……。わてんとこで洋裁して働いていました……。」

若いサラリーマン君は、ニヤニヤしながら聞いている。

「……母親は生んでから家出しました。長いこと帰ってきません。そやさかいわてらが引取りました。……。わてらの〃おもちゃ〃でした。この子もなんや遠慮するようで。……。でもな、やっぱりかわいくなります。この前、突然母親が子供かえしてくれといって来ました。そやけど、今どきなんで返します。わてらの子です。そういうてかえしませんでした。……。それからその女みてません。どうしてますやろな。……。」

「……。」

「この子どうなりますやろ……。女の子ですし……。」

サラリーマン君は無関心をよそおっている。

「あんたかて、若いんやさかい、まあ、こんなことにならんようにな。」

「はあ……。」

話しはなお続いた。

私は信じられなかった。この女がなぜ、あの見ず知らずの男に話さなければならないのか。うそか。―― いや違う。だれかに話したいのだ。全くの他人に。この赤ちゃんが大きくなっても知ることのできない秘密を、この母親は話している。この船を降りたら、ここにいる人は二度と会わない。あっても顔もわからない。だから話している。―― この母親は不安なのだ。この子がどう育つか。そして生みの親、この浮世に対して漠然としたいかり。それとあわれみ。そして自分自身について。

―― 船は神戸港の入口まで来ていた。もう、空は星でいっぱい。六甲の山なみに添って、明かるくネオンが輝く。でも、何かいつも見た輝きとは違っている。

着岸する。薄暗い中突堤。タラップを降りる。客は家路を急ぐ。広いふ頭。だれも何も言わず、歩いていく。外国船の汽笛がもの悲しく響いた。

『月光動浅瀬　風韻砕枯菅』

柳宗元

（酬韶州裴曹長使君詩）

高校から大学へ そして何処へ

T21　赤木康雄

高3のクラス担任は目のギョロッとした、いわゆる助平なスポーツマンでした。その先生を中心に、灰スクールを描いてみました。

浜辺で見つけた赤い貝殻、握って眠る。薄桃色の霧と漂う。楽しい……そうか、この貝の中に桃源境があったんだな。仲間がいる。皆でチューリップ畑を歩き始める。

やがてどこからか声が聞こえてくる。「一二、一二　まっすぐ歩くんだよ。」　始めて自分が小さくなっていくのに気付いた。この声とともにあたりが青味をおびてくる。黒くつながる先に光がチラッと見えるようだ。出口はあるな ―。進むにつれていよいよ暗くなってきた。自分はますます小さくなっていく。

目だけが不思議にギラギラ光った。皆で94個、あれ、あの2個大きいな。何かいってるよ（がんばれ、あそこに唇が待っている）だって。「唇」？　なんだろう、いいものらしいけど、いや、いいものに違いない。こんなに苦労して歩いてきたんだもの。

だけど俺達、小さくなってしまった。あそこに唇が待っていたって本当に相手にしてもらえるの、押しつぶされるんじゃないの、急に大きくなんかなれるわけないじゃない。

「オーイ、起きろよ。」　遠くで声がする。朝だな、もう夢はお

わりだ。

（高校の雑誌、クラスの窓）

昨年の9月22日、誕生日なのですが、クラス討論で大学について話し合った時、司会をやりました。その夜、書いた文章

クラス討論の限界か、皆の不慣れか、自分の独善的暴走か。朝よりのイライラ爆発。「かってに、しゃべったらええやんかえ。」これに対する池内紀の発言、「たよりない、なってない、許せない。」そして「大学での勉強なんて役に立つものか。」

答えは4年間のうちにでる。

そして自分自身に対する答え、反応はいつでるか、わからない、10年後それとも明日、あるいは今日かもしれない。

この一年をふり返って

B19　川辺利招

この一年の風韻会の活動をふり返ってみるに際し、まず考えておかねばならないことは、風韻会の基盤である神戸大学が、この一年大きく揺れ動くことで、各サークルに与えた影響についてである。いわゆる「神大闘争」が各サークルに与えた影響には、次の二つのものがあると思われる。一つは、サークル自体が「神大闘争」のエッセンスを真正面から受けとめることによって受ける影響であり、他の一つは、サークルとしてそれに取り組むのではなく、それ以前の個人として取り組むことによってサークルが受ける影響である。前者の場合、直接的・内面的であり、その影響を受けたサークルは、ともすると全く異質のものとなる。後者の場合、間接的・外面的であり、この影響は受けても、そのサークルは、ともかくも従来の活動を続けることができるのである。

そして、風韻会は、まさしくこの後者の影響を受けたのである。即ち、活動への参加者の減少、各学部間の行事日程の相違から、風韻会として行事予定をたてる際の困難さ、資金面での苦労といった具体的影響を受けたのである。こうした影響により、十分な活動はできにくく、消化した行事にしても中には、ゆきあたりばったり的な性格を多分にもったものもあって、全般的に活動は低調であったと思われる。

しかし、今年の風韻会の低調さは、こうした影響のためだけであったのだろうか。否、より本質的には、風韻会の体質にかかわる問題があったからこそであると思うのである。それは、方向性の欠如であり、「闘争」からの逃避の場と化するかのような時もあったりして、今年特に目立った部員各自の創造的意識の不足であると思う。この二つは相互に作用し合うものであるが、この両者の不足が今年もまた改められ得なかったのである。こうした根本的な点は変わったとは思われないのであって、これを如何に改善するかが今後当分の課題となりそうである。

文化総部活動報告

B19　谷村鉄郎

昨年（一九六九年）神戸大学に於いても、寮の設備改善問題を契機として、いわゆる大学紛争と呼ばれる状態になり、教養部のストライキを発端として、全学的な封鎖、ストライキという異状事態となりました。

このような状況の下で、現代社会における大学の存在価値というものが、きびしく問い詰められました。それと平行して、各文化サークル内部に於いても、サークルの本質、理念という事について討論がなされ、日常のサークル活動状態についての反省がなされました。そうした過程を通して、従来のサークル活動を自ら放棄するサークルあるいは、不可能になるサークルもあらわれました。こうした事態は、文化サークル連合である文化総部内部でも、当然おこり、「文総とは何か」という問題についての討論、反省が為されましたが、種々の理由により常任委員の多数が辞任し、実際的な文総の機能が完全にマヒしてしまいました。

しかしながら、大学の紛争に一応のピリオドが打たれた昨年の末頃から、残った委員を中心に新しい文化総部を再建するための活動が行なわれています。

あしあと　昭和44年度

三月　試験延期、ストライキ、バリケード封鎖と揺れ動く、学内状勢のもと、四十四年度は、春合宿の中止という型でスタートした。

2日（日）十七回生歓送謡会　於エクラン

会場の外には、前夜来の学生間の対立のため、機動隊が待機するという険悪なムードの下、十七回生十一名を送った。

宇治師範、伊藤、五十嵐、高木、戸田先輩が出席して下さった。

30日（日）　凌霜謡会　於松泉館

素謡「敦盛」に参加させていただく。有志七名。

四月　入学式は中止となり、風韻会は新入生のいない新学期を迎えた。

11日（金）～13日（日）　臨時強化合宿　於摩耶山天上寺

4日の総会で5月の三大学交歓謡会に参加を決定、更に、中止になった春合宿の不足を補ない、体制がためを行なう意味で計画された。練習中心の厳しい合宿であった。

練習曲「大江山」「熊野」「賀茂」「小督」「鞍馬天狗」「養老」「敦盛」「玉　」「葵上」「善知鳥」「屋島」「頼政」「千手」「通小町」以上14曲を消化した。

29日（火）　学連月並会　於甲南大学
新入生ゼロの月並会。合同連吟「敦盛」ほか。

五月

4日（日）　三大学交歓謡会　於朝陽会館
舞囃子「船弁慶」（中島）「春栄」（岩本）
素謡「千手」（シテ根岸　ワキ中西　ツレ武内）
連吟「賀茂」（シテ河野）「敦盛」（シテ武田）
仕舞「俊成忠度」（小川）「富士太鼓」（今宿）「玉之段」（菊地）「山姥」（北本）

11日（日）　宇治風韻会　於大槻能楽堂
有志十二名参加。連吟「田村」「敦盛」他。

20日（火）　大学祭発表　於学館ホール
今年は大学祭はなく、反大学祭であった。文総デーもなく、サークル独自の発表ということになり、我々は資金不足の折から、援助金を獲得することにした。この日、本年はじめて新入生が入部した。

25日（日）　反大学祭園遊会「猩々」開店　於六甲台学舎前庭
朝からの雨も昼前にはあがり、予想外の人出となった。買出しに大あわて。バリケード封鎖中の学舎を尻目に一日中大いににぎわった。

六月

15日（日）　学連春季大会　於山本能楽堂
連吟「屋島」（シテ田中）「班女」（シテ定秀）
仕舞「鶴亀」（山本）「芦刈」（福田）「小袖曽我」（河野・米田）　合同連吟「箙」

29日（日）　四大学交歓謡会　於神戸大学学生会館ホール
舞囃子「春栄」（高島）「船弁慶」（賀川）
連吟「阿漕」（シテ米田）「千手」（シテ佐伯ツレ中村）
仕舞「田村」（川辺）「東北」（谷村）「松風」（根岸）「天鼓」（田中）「大江山」（武内）

七月

13日（日）　宇治風韻会　於松泉館
有志10名参加。連吟「天鼓」他。

八月

21日（木）～27日（水）　夏季強化合宿　於和歌山県熊野本宮
全学集会、大学法強行採決、封鎖解除、授業再開と、事態が収拾されてゆく中で団結を図るべく強化合宿をもった。一年生一人という、人数的には例年の半分と淋しかったが、終始なごやかな奮意気で楽しい合宿であった。全員で熊野本宮大社へ素謡「羽衣」を奉納した。
練習曲「船弁慶」「蟬丸」「井筒」「三井寺」「清経」「

安達原」「小鍛治」「女郎花」「芦刈」「忠度」「紅葉狩」「羽衣」「田村」「竹生島」「猩々」「富士太鼓」「小袖曽我」「菊慈童」「経正」以上19曲

十月

10日（金）～12日（日）　ジュニア合宿　於宝塚市中山寺
9月の授業再開と共に、新入生も登校し始め、風韻会にも新たに8名が入部した。秋季発表会への強化練習の意味をもかねて、一、二年生で合宿がもたれた。

十一月

8日（土）　第5回神戸大学風韻会秋季発表会　於学生会館ホール
主なる番組　舞囃子「忠度」（菊地）「熊野」（定秀）「芦刈」（北本）「班女」（加嶋）素謡「松虫」（シテ井口宗敬ワキ藤尾豊一）「葵上」（シテ松原貞吉ツレ尾島洋三ワキ丹羽啓祐）独吟「起請文」（栗岡治作）仕舞「花筐」（宇治正夫）
宇治師範、井口、栗岡、藤尾大先輩、尾島、丹羽、高木、沼田、福山先輩の参加をいただき盛会であった。

十二月

13日（土）　学連秋季大会　付連吟コンクール　於大槻能楽堂
舞囃子「清経」（今宿）連吟「紅葉狩」（シテ竹之内）「東北」（シテ苅田）仕舞「鶴亀」（苅田）「草子洗小町」（赤木）「羽衣」（下田）熊野（小原）
コンクール曲「女郎花」七位。ちなみに今年度入賞校は、一位「玉鬘」（神女院）二位「鞍馬天狗」（関学大）三位「葵上」（帝塚山）であった。
本年度師範練習曲は次の通り
「班女」「阿漕」「錦木」「国栖」「松風」「通盛」「鶴亀」「吉野夫人」「紅葉狩」「春日竜神」「楊貴妃」「邯鄲」

風韻10号賛助

神戸銀行

御影支店

幹事長就任にあたって

E20 福田啓介

此の度、次期幹事長の役を引き受けることになったわけですが、自分自身の今までのサークルに対する取りくみ方を省みて、はたしてこの大役を全うできるものか、はなはだ不安に感じております。しかし一旦引き受けたからには、風韻会の伝統を受継ぐために全力を尽したいというのが現在の心境です。

さて、当面する最大の課題は、先般の大学闘争後の虚脱的な状況を克服し、いかにして充実したサークルに再建するか、だと思われます。それには、部員全体が自分にとってサークルとは何なのか、ということを再度、確認する必要があろう。今まで、何回となくサークル論が論ぜられ、人によっては、実りのない議論だと受取る者もあろう。しかし、たとえ結論が見い出せなくとも、各人が主体性を持ってサークル活動を行うための方向性を示唆するのにその議論は有効ではないだろうか。そこで、サークル論を斗う場を保証し、また、サークル全体のコミュニケーションを円滑にするものとしても、週一度（例えば、土曜日の練習の後）、ミーティングを行えたらと思っています。

最後に、今後のサークル運営上、様々の困難な問題に直面することが予想されますが、先輩諸氏の良き御指導と、同輩、後輩諸君の全面的な協力をお願いします。

【新役員紹介】

○幹事長　福田啓介（経済学部20回生）
○会計委員　河野豊（経営学部20回生）
○学連委員　山本秀人（経営学部20回生）
　　米田耕造（経営学部20回生）
○文化総部委員　中村久美子（教育学部20回生）

陸奥雑詠(四)

北国の夏はいまだしタンポポの花にそよげる春風やさし
啄木の心を知れり南部富士威風堂々大地を圧す

（侃）

編集後記

◎ここに、「風韻」第十号を御届け致します。

◎神戸大学風韻会誌「風韻」も、回を重ねて第十号を発行するまでに至りました。この間、いろいろ御協力頂いた方々には心より、改めて感謝致します。

◎昭和44年度は、大学問題が大きくクローズアップされ、諸々の方面に多大な影響を及ぼしたことは、皆様御承知の通りですが、当神戸大学に於きましても例外ではありません。風韻会においても、大きな試練の年となり、どうにかこれを乗り越えて今日に至りました。この雑誌においても、大学問題を特集するつもりでおりましたが、大学が正常化に向うにつれ、長い紛争で疲れ切ったような気分、この問題に触れるのがおっくうになるような気分が、そこここに感じられ、原稿も集まらず、遂にこの特集を中止せざるを得なくなった次第です。御容赦下さい。

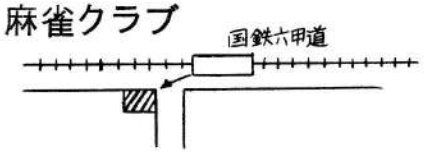
◎今回も、先輩の方々に御願いした原稿の回収がうまくいかず、松岡、井上、原の三先輩のみでした。御忙がしいとは存じますが、たとえ一行でも寄稿頂きたく、先輩諸兄の御協力を、ここに改めて御願い致します。

◎最後に、「風韻」第十号発行に際して、幾多の御助力を賜った方々には、心より感謝致します。有難うございました。

淡雪は降れど積らぬ六甲の山
四年の夢を覚ます春風（侃）

編集委員
菊地侃
中島克己
今宿純男

麻雀クラブ



〔六甲セブン〕竹内一枝
電話 (85)4205
(82)3415

スポーツ用品販売
御影スポーツセンター
神戸市東灘区御影本町4丁目
阪神御影駅南(81)6314

周遊券発行
団体旅行
海外旅行
ゼミ旅行・合宿
新婚旅行‥‥旅の事なんでも
全観ツーリスト
阪神電鉄御影駅前
電話 (85)0645
(81)2461

つぼや製パン株式会社
本社　阪神御影駅東　電話 (84)0720
洋菓子部　〃 (84)9210
阪神御影支店　〃 (85)7651
阪神夙川支店　〃 西宮(34)2121
店員アルバイト募集（パートタイム）
午前又午後5時〜9時